
ファンチェルス王国物語（仮）

天野 杏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンチエルス王国物語（仮）

【Nコード】

N0024P

【作者名】

天野 杏樹

【あらすじ】

ドレス嫌い、ダンス嫌いなどなど、貴族のお嬢様が好きそうな物全てが嫌いな私、ファンチエルス王国伯爵令嬢イツキ・セレナード。好きな物は幼き日から父親より習った剣術。「舞踏会<剣>な私が舞踏会から逃げるが為に兄が隊長を務める近衛隊に男装して入隊。まあいいか、と楽観的な父と兄に対して、何とか連れ戻そうと躍起になる母&姉達からのりくらりと逃れてるうちにあれ？なんか副隊長に出世しちゃいました。

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。
また、物語が進む上で残酷シーンがある場合がありますので注意して下さい。

プロローグ

南方を海、北方を山に囲まれた此処、ファンチエルス王国は私が生まれ、育った国。

この国で、騎士団長を務める父と元子爵令嬢だった母の間に生まれたのが兄様と姉様三人と私。

兄様は剣術の才が抜きん出っていて、十の時には城の騎士団育成機関へ行ってしまった。十五歳前後が普通だったから、兄様は凄い人なんだと思う。

姉様三人は皆いかにも「女の子」って感じの白い肌とぱっちり二重。舞踏会だつて大好きで、しょっちゅう何所何所でナントカ子爵がうんたらかんたらつて騒いでは飛んでいく。

え？私？

んーと、まあまずしたくもない笑顔張り付けなくっちゃならない舞踏会は勿論のこと、ドレスやら宝石やら人形遊びやら………うえ、考えたくもない程嫌いだ。

それと、まあ、話方から分かるかも知れないけど、私は伯爵令嬢っぽくない……というか、伯爵令嬢らしい所が無い。

服は何時もシャツとズボンだし、ダンスの練習なんかより剣を振り回してた方が楽しいし。

腰まである銀の髪は一樣、乳母やら母様やら姉様やらが五月蠅いから切らないで一つに結んでるけど、正直鬱陶しくつてたまらない。昔からこんな性格で、人形より剣が好きだった。母様と姉様達は何とかして女の子らしくしたかったらしいけど、生まれてから十八年、成果は見ての通りである。

途中、母様は（ありがたい事に）諦めてくれたけど、姉様達は全く諦めてくれず、無理やりドレスを着せ、舞踏会へ行かせようとするもんだから、逃げるように兄様が隊長を務めている近衛隊へ入った。確か、十一の時だっけ？

元々、王国内最強とも言われた父様に鍛えられ、時たま帰省する兄様にも稽古をしてもらっていた為、実力はあつたし、まあ、えっと、小さい胸のおかげで女ってばれなかったし、居心地よかったから、ちゃっかし居座っちゃったんだよね、うん。

最初の頃はひよろつとしてる私を馬鹿にした隊員がいて、頭にきたから叩きのめしてたんだよねー、懐かしい。

そしたら、何時の間にか一目置かれるようになっちゃうし、何時の間にか副隊長になってるし……

あれ、こんな予定はなかったはずなのになぁ……

私と家族 1 (前書き)

ヒロインは伯爵令嬢なのに口が悪いです。

伯爵令嬢なのに……

ヒロインなのに………

私と家族 1

(イツキside)

「ほら、イツキちゃん？可愛いクマさん人形よ！」

姉様、その馬鹿デカイテディベアな何ですか？
可愛い所か大迫力でむしろ怖いです。

「あら、シエスタ姉様、イツキは興味無さそうよ？そんな物よりこ
っちのドレスの方が好いわよね？」

姉様、そんなキラッキラでフリッフリなドレス、嫌悪の対象です。

「ふふふ、フェアラ姉様もですわ。イツキ、この赤い宝石なんてど
う？」

姉様、何ですか、その無駄に装飾された宝石のペンダントは。

………というか、現実逃避していいですか？

朝、起きてみると何だか目がチカチカした。

まさかと思い起き上ってみると案の定、姉様方がそれはもう、神々しい笑顔笑顔笑顔……

毎朝の事だとしてもいい加減にしてほしい。

てか、寝る前に鍵、閉めたよね私？

扉を見ようとしたが、姉達が前を邪魔して見えない。

邪魔です姉様方。

しょうがないから体を右に傾ける。

嗚呼、見えた。

紐を通した鍵を片手に微笑みながら立っていらっしゃる我が母上様が。

というか、その鍵、明らかに父様から奪った物ですよね？

私の部屋の鍵は、私と父様と部屋を掃除する女中のリランしか持っていない。

理由は想像できるだろうが、母様と姉様方のこの襲撃から逃れる為だ。

しかし、うん。

あの父様専用の鍵は母様の手の中。

さては泣き落したな、母様。

ぎろりと睨めば、につこり笑って去って行く。

……明らかに「勝った!」と言わんばかりの笑い声と共に。

取り合えず、着替えたいので残っている姉様方には出てって貰いたい。

あ、それより先にこの状況の説明を願いたい。

「おはようございます、シエスタ姉様、フェアア姉様、アリリア姉様。取り合えず、朝から何勝手に人の部屋に許可なく侵入してやる」

「「「おはようイツキ」」」

あら、素敵なハーモニー、じゃなくて。

「あらあら、そんなに額に皺を寄せちゃ駄目よイツキ。可愛い顔が台無しになっちゃうわ!」

シエスタ姉様が身を乗り出し、私の眉間をぐりぐり押す。
……地味に痛いです、姉様。

「それに”やがる”なんて言葉、淑女が使つて良い言葉ではないわよ？フィードのお兄様の影響かしら？」

アリリア姉様、何か私に対して不満がある時、何時も「『フィード兄様所為』の方程式が出来あがりますね。

「あーもう、うるさい。着替えたいからさっさと出てけ！」

お小言が始まりそうだったから、さっさとベッドから出て、姉三人をぐいぐい押して追い出した。
かなり重労働な気がする。

はあ…さっき起きたばっかなのにもう疲れた。

気を取り直してクローゼットから服を取り出す。
普通の貴族だったら此処で女中さん達がどっからともなく現れて、なんて事もある。

母様や姉様方はちゃんとそういう扱いをされている。
が、私は違う。

というか、そもそもそう言いたいかにも「お嬢様」な扱いが大の苦

手なのである。

トラウマがあるわけではない、ただ、性分に合わないだけ。自分で出来る事は極力自分でやりたいのだ、私は。だから私付きの女中はリラン一人しかない。

さつさとブラウスを着て、ズボンとブーツを履く。

姿見の前に立ち、櫛で軽く梳くと、何時もと同じ紐で高い位置で括る。

うん、完璧男の子みたいだ。

フェアラ姉様みたいに胸が大きかったりすれば女だって分かるけれど、生憎、十歳の絶賛成長中のガキには無理だ……というかあんな邪魔な物いないし。

「よし、着替え終わりつと……」

これから朝食の為に広間へ行かなくてはならない。

朝食は楽しみだが、またあの四人（あ、母様と姉様方ね）と顔を合わせるのかと思うと憂鬱だ。

なんせ、この格好でいる度（つまり毎日）、

「淑女がなんて恰好をしてるの！」

や

「髪の毛はちゃんと巻いたりして整えなさい！」
など

ぐちぐち五月蠅いのだから。

料理長の作るめちゃくちゃ美味しいクロワッサンも、味が半減する
つつーのー！

だからって朝ごはん無しはきつい。

今日は近衛隊に所属しているセレナード家唯一の男子であるフィード兄様が帰ってくるのだ。

隊長職に就いてから中々帰ってこれなかった兄様はやっとのことで
休みをもらい、今日、半年ぶりに帰ってくるのだ。

私の剣の上達振りを見てもらうんだから、朝食抜きだけは御免被り
たい。

仕方がない、お小言は聞き流すとして朝食だけに気持ちを向けてよ
う、うんそうしよう！

私と家族2

イツキside

この国には騎士団と近衛隊がいる。

騎士団は国を守る戦闘集団であり、他国と戦争になった時に戦うのはこの人達だ。

騎士団団長と呼ばれる人が騎士団の中のトップであり、貴族・平民関係なく、体力と頭が共に一番の人になる。

そしてその人の下に隊長の人が十人いて、その各隊長の下、一隊約三十人程度の小部隊がある。

つまり、騎士団だけで軽く三百人は超えている。

こう考えてみると騎士団団長ってすごい人だって感心しちゃう……
んだらうね、普通の人は。

「はいあなた。あーん」

「あーん。うん、やっぱりサリナの手から食べる料理が一番美味しいよ」

屋敷の食堂。

目の前で繰り広げられている光景に思わず砂糖を吐きなくなる、いや砂か？

因みにサリナって母様の名前ね。ごつい体格の癖に、「あーん」とか語尾にハートが付きそうなくらい喜んでるのが父様。

……………認めたくないけど騎士団団長。

何時もは王都であるテルキアに居るんだけど、今は二週間の長期休暇で帰省中って訳。

と言っても、他国が攻め込んできたり〜的な事（まあ、ここ二十年ぐらいは平和そのもので、そんなことはないが…）があればテルキアに強制帰還なんだけどね。

因みに、長期休暇を取れるのは騎士団だけ。

一部隊ずつローテーションで休みが貰えるんだけど、近衛隊は王族を守っているから当然の如く長期休暇なんて無理。

貰えたってせいぜい三日か四日だし、駄目になる時だって少ない。い。

だから、今日という確実に兄様が来ると分かっている日はさっさと食べて兄様が来る前に自主練しに行くのに限る。

じゃないと……

「イツキ、そう言えば、今日はダンスの練習の日よね？シャルト先生はもうお見えになってましたわよ」

うつ……しまった、遅かったかつ！！

シャルト・ローデ

セレナード家へダンスを教えに来てる先生で……………オカマ。

いや、オカマが悪いんじゃないんだよ？
ただ、あの濃い化粧とクネクネダンスが……
うん、まあ、会う機会があったら分かると思う……もう何も喋りたくない。

「何時もと同じ様に、ダンスホールにご案内してあるから、早くそのパンを食べ終わらせなさ」ああ、お姉さま！私、顔を未だ洗ってませんでしたわ！！それに愛馬のお世話をしなくては！」

アリリア姉様の声を遮って声を張り上げる。

そのまま脱兎のごとく廊下に飛び出す。

後ろから「淑女が大声なんてはしたないわよっ！」とフェアラ姉様の叱責が聞こえたが、知るか！

言葉使いはキレーにしたんだからほっとけ、そしてあんたの方が声大きいわっ！！

「ディアナ、私もう無理かも。ダンスなんて、あんな重い衣装来て踊るのの何所が良いのなんて分かんないし、先生気持ち悪いし、化粧濃いし、似合っていないし……」

屋敷の裏。

馬小屋の一角に、私の愛馬であるディアナがいる。

毎日のお世話の賜物なのか、毛並みはつやつや、おめめはきらきらの可愛い子に育ったよ、うん。

そんな愛馬に抱きつき、愚痴を言うのはどうかと思うんだけど、他に愚痴れるのってリランぐらいしか居ないし……

あれ、私って何か寂しい子？

まあ、いいんだけどさ、別に、気付いた瞬間悲しくなった、なんて事無いんだから！！

と、自分を慰めつつ、ディアナにすりすりと頬擦りする。

相変わらず素敵な毛並みっ！

そう言えば、この頃乗馬してなかったなあ……

かけずり回りたいなあ……

兄様が来るまで乗ってようかな……

「イツキ？」

物思いにふけっていると、背後からテノールの心地よい声が聞こえてきた。

聞き覚えのある大好きな声。

はっとして振り返って駆けだす。

「フィード兄様!!」

入口に佇む人物に思いっきり抱きついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0024p/>

ファンチェルス王国物語（仮）

2011年1月8日11時32分発行